

沖縄におけるかんしょの伝来から品種の分化と発展(1)

沖縄いもづる会 会長

きりはら
桐原

しげもと
成元

九州沖縄農業研究センター糸満駐在 上級研究員

おかだ
岡田

よしひろ
吉弘

沖縄にかんしょが伝来してから2016年で、411年となる。2015年に沖縄県嘉手納町でかんしょ伝来410年を記念したフォーラムが開催されたことは、本誌127号に詳しく紹介されている。沖縄へかんしょが伝来してから全国へと広がっていく歴史についての文献や著書は多数存在しているが、ここでは、県外とは異なる発展をしてきた沖縄県のかんしょの品種と栽培について、さらに現在、沖縄県で多く栽培されている“紅イモ”と呼ばれている肉色が濃紫を呈するかんしょの経緯について追ってみることにする。

1 かんしょの伝来以前

かんしょが琉球に伝わる約300年前、当時の琉球人は私貿易のためシンガポール海峡を往来していた。1317年には、シンガポールに向かった小船が暴風により中国に漂着した記録がある。また、琉球王府によるシャム（現タイ国）や高麗（朝鮮の王朝）との通商貿易は1390年以来100年以上続いた。

しかしこの通商貿易も、ポルトガル^{わこう}の東南アジアへの進出や倭寇によって衰退していったが、中国との貿易が1372年から始まり、次第に盛んになっていった。1392年福

建省^{びん}閩人36姓が琉球に帰化し、中国との親交に重要な役割を果たした。また、暴風で琉球に漂着し定住帰化した中国人が、焼瓦^{ぬちはな}や貫花の技術を伝えている。1439年には福建省に琉球館を設置し、進貢貿易は毎年実



図1 野國總管が祀られた「世持神社」（那覇市奥武山公園内）（上の写真）と世持神社境内に建立された「産業恩人記念碑」（下の写真）

注：産業恩人記念碑には蔡温や儀間真常とともに、甘藷の苗を中国から持ち帰って栽培し、島民を救った偉人として野國總管の功績をたたえる碑文がぎざまれている。

施されるようになり、中琉間の人的交流は盛んになっていった。

かんしょは、スペインによるフィリピン占領後の1565年から1571年にかけてスペインからルソン島へ、その23年後の1594年に福建省閩地方へもたらされた。それからわずか11年後の1605年、野國總管のくにそうかんが中国から帰還する際にかんしょの苗を琉球へ持ち帰ってくるのである。かんしょが中国に伝わってから短期間で琉球にもたらされた背景には、中国との交易が盛んであったことと、野國總管がかんしょを食糧作物として着眼し、評価した点にあった（図1）。

2 かんしょの伝来とその後

野國總管が中国福建省から沖縄に持ち帰ったかんしょ「朱薯（あかいも）」は、その後、儀間眞常ぎましんじょうらによって、10数年のうちに、琉球王府内の沖縄本島や周辺離島へと普及し、1611年に島津藩の領土となった奄美群島へと伝わっていく。このころには那覇の市場でかんしょの販売が行われていたようである。1614年に那覇に寄港したウィリアム・アダムズ（三浦按針）は、そこ

で購入したかんしょをリュウキュウイモとして長崎平戸へ持ち帰り、リチャード・コックスによって栽培がおこなわれた。

かんしょの伝来以降、短期間のうちに琉球国内に普及していったが、17世紀が終わりに近づいた1691年、儀間眞常ぎましんじょうの3代後に当たる儀間眞周ぎましんしゅうは、下級官吏である船越筑登ふなこしちくどうん之（筑登之は役職名）が中国から持ち帰った「唐芋」の普及を図った。1695年、伊舎堂盛富いしやどうもりとみは、福州に派遣された際、新城筑登あらぐすくちくどうん之、富名腰筑登之ふなこしちくどうんを使って「黄蕃薯（きはんす）」を手に入れた。伊舎堂は、琉球にかんしょが導入され90年を経て、複数の品種が栽培されるようになり、かんしょ畑に自然実生が目立つようになったことを発見・確認したとされる。この時期には、既に不和合群の異なる品種が栽培されていたようである。交配不和合群の異なる品種が隣接して栽培され、両品種に花が咲けば自然と結実し（図2）、大半がその場で種子を落とす。翌春には自然実生株が一面を覆うこともあるが、春植えの畑に植付けした後、実生株が自然に生育するため、生育途中で茎葉の異なる株を除去したり、収穫時



図2 沖縄のかんしょ畑での開花の様子（左）と自然実生（右）

に異なるタイプのイモが見つかることがあるので、既存の栽培品種と比較して取捨選択する等が行われてきたものと思われる。このように、優良な自然実生株を発見し、新品種として広めていったことが記録されており、育成者は名を残している。また、17世紀に沖縄での記録に出てくる導入品種は、「朱薯（あかいも）」、「唐芋」および「黄蕃薯（きはんす）」の3品種である。しかし、毎年のように福建省へ往来する進貢船貿易や私貿易によって、かんしょは幾度となく琉球へと持ち込まれた可能性は考えられないだろうか？

1707年、^{きんまじりくちやむら}金武間切古知屋邑（現・宜野座村松田）の^{な か ま}名嘉真なる人物が、導入当初の「朱薯」とは茎葉の特徴が著しく異なる株を畑から掘り上げ、自宅の敷地内で観察した。そしてこの株が他の品種に比べて茎葉は良く繁茂し、早期に肥大し、収量性が良く、耐風性、耐寒性に優れていた。この自然実生（おそらく？）からの品種は、採取された地名をとってクチャウム（古知屋芋）と名付けられ、普及していった。「クチャウム」は130年以上栽培が続き1838年頃まで栽培された記録があるが、その後記録が途絶えてしまった。記録に残っているなかでは、「クチャウム」は沖縄で育成した最初の品種である。また、1851年、^{ひやこんちく}比屋根筑登之親雲上（ちくどうんぺーちんは領土を治める役人）方登なる人物は、各地をまわって収集した諸々のかんしょの蔓（各地で栽培されている自然実生から選抜された在来品種）のなかから早期肥大性でイモの個数が多い個体を選び出し、「大黒芋（ウフクルーンム）」として普及を図った。前述の伊舎堂、比屋根は王府より功績を称えられ

た。「クチャウム」および「大黒芋（ウフクルーンム）」は非常に優れ、広く普及した品種であるため王府の目に止まり、記録に残ることとなったが、古い時代のことであり、17世紀末に伊舎堂が自然実生を発見してから150年を経る間、記録に残ることもなく、多くの自然実生が各地域で選抜され、栽培されていたことは十分考えられることである。

明治から大正期にかけて、民間育種家による新品種の育成は活発化していく。「暗川」（クラガー）や「長浜」は1867（明治1）年に育成したと伝えられ、「那覇屋」（1890年）、「佐久川」（1902年）、「羽地台湾」（1903年）、「真栄里」（1905年）、「坂下」（1912年）等の代表的な在来品種は1910年頃にかけて篤農家等によって発見および育成され、県内での主要品種として栽培された。また、無数の自然実生品種が局所的に栽培されており、その数は120種とも300種ともいわれている。

3 分型淘汰事業

これまでに民間育種家によって育成され普及していった品種は、変異による分化や劣化が目立つようになった。1914年、糖業試験場國頭苗圃（國頭郡羽地村；現・名護市）において人工交配が開始された。5年後の1919（大正8）年から1926（大正15）年の間、分型育種法を用いて県内各地から収集された在来品種の系統、品種から優良系統の選抜を実施し、「真栄里」35系統、「佐久川」20系統等から優良系統が選抜された。「真栄里30号」、「佐久川17号」等は、「沖縄100号」が育成される1934（昭和9）年までは県の奨励品種となっていた。

4 人工交配の開始と功績

今から100年ほど前の、1914（大正3）年、糖業試験場國頭苗圃において、かんしょの人工交配が開始され、1943年の太平洋戦争で施設が破壊されるまでの29年間実施された。1918（大正7）年に人工交配が行われ、その後の選抜試験によって1923（大正12）年、沖縄1号から7号（4号を除く）までの6品種が育成された。その翌年奨励品種に編入された。

この時期、県外、国外からも交配親となる品種が多数導入されている。1928（昭和3）年に実施された交配（七福×潮州）から実生選抜され、1934（昭和9）年に「沖縄100号」が誕生する。他にも101号から105号までの6品種が奨励品種に編入される。昭和期になると沖縄で人工交配・採取し、県外へ種子の配布を実施するようになる。1943年までの18年間で配布した種子数は約23.7万粒であった。

戦前・戦中にかけて栽培されていたのは、多くは在来品種であった。1931～1940年に、広く栽培された「真栄里30号」、「羽地台湾

7号」、「那覇屋6号」等の他にも百数十ほどの在来品種が局所的に栽培されていた。これらの品種は戦争で消失したものも多く、戦後は、焼失を免れた約50品種や、引揚者などによる国内、外国からの導入により、徐々に品種数を増やしていった。

5 紅イモのルーツを探る

かんしょの品種別に肉色の特性が分かるようになるのは、農業試験場等の公的機関が設置され、育種事業実施のため、品種・系統の収集によって特性表が作成されてからである。手元にある品種の特性表で最も古いのは、「沖縄に於ける甘藷の育種事業とその業績の概要」（農林省農業改良局研究部：昭和26年2月（1951年））に記載された甘藷品種特性一覧表である。現在の沖縄では、肉色が濃紫色系の紅イモ品種の栽培が主流となっているが、濃紫色系品種のルーツを辿ると終戦後、間もなく育成された「宮農36号」に辿りつく（図3）。



図3 沖縄の“紅イモ”の礎となった「宮農36号」

(1) 戦後から日本復帰(1945～1972年)までの流れ

戦前から戦後にかけて、沖縄ではかんしょは貴重な食糧源となっていた。かんしょの伝来以来、イモの肥大性(多収性)や早生系、食味の良さ等、また、皮色によって朱薯、黄蕃薯、アカイモ、シロイモは記録にあるが、肉色についての記録は少ない。その後、品種の識別や各品種の特性をもとに新品種の育成が開始された頃から、品種保存と共に各品種の特性表が作成され、その中に肉色も記載されたものと思われる。いずれにしても、この時代に至るまで肉色に関心が示されることはなかった。

戦争によって多くの品種が消失し、食糧難が続く中、1952(昭和27)年、奄美群島の日本復帰とともに、琉球列島米国民政府にかわって琉球政府が発足した。この当時、中央農業研究指導所(現・沖縄県農業研究センター)はアメリカ、ハワイ、台湾、日本から115種類のかんしょを導入し、保存品種は増えていった。1961(昭和36)年、琉球政府は「ナンゴク」、「ヨギムラサキ」、「アキホコリ」、「農林17号(ナカムラサキ)」の4品種を奨励品種とした。「農林17号」を除く3品種は中央農業研究指導所で育成されたものである。このうち「ヨギムラサキ」の名称は研究指導所の所在地である那覇市与儀から、また肉色が紫であることから命名されたものである。この品種の来歴は、1949(昭和24)年に同研究指導所における、沖縄1号×九州12号の人工交配に由来する。当時の特性表による肉色の記載は、沖縄1号(白)、九州12A号(WY)、九州12B号(YW、カロチン2)であり、「ヨギムラサキ」(淡紫～紫)と比べてみると、

親品種の肉色は受け継がれていないようである。肉色がどの程度の紫を呈していたのか、今となっては知る由もない。この「ヨギムラサキ」は奨励品種となった1961年から1970年代後半頃まで栽培が行われたようであるが、栽培面積は伸びず、“紅イモ”ブームが起こる前の段階で、注目されることなく消え去っていった品種である。

「沖縄に於ける甘藷の育種事業とその業績の概要」(農林省農業改良局研究部、昭和26年2月(1951年))によれば、保存品種が175品種あり、そのうち肉色が紫斑を呈するものは9品種あるものの、紫色や濃紫色を呈する品種は存在していない。保存品種を調査した時期は、農林番号や九州系統番号から、戦前ではないかと思われ、その中には“紅イモ”と呼ぶに相応しい紫色や濃紫色を呈する品種はなかったものと推察される。「農試資料第3号、琉球農業試験場、1968年4月」に記載されている保存品種数は166である。うち紫斑を呈するものが15系統、紫色2、で唯一濃紫色を呈するものが「宮農36号」である。また、手書きの「かんしょ品種の特性、琉球農業試験場：作成年不記載」には保存品種が201系統あり(手書きの資料は、保存品種数から1968年より後、日本復帰の1972年の間に作成されたと思われる)、うち紫斑を呈するものは5系統、淡紫色2、紫色6が記載されている。

(2) 年代別の栽培品種の推移

次に、年代別に県内の品種別の栽培面積の推移を見てみると、多い順に、1943年調査では、「沖縄100号」(黄白)、「真栄里30号」(黄)、「八重山赤粉」(黄)、1950年代では「沖縄100号」(黄白)、「宮農7号」(黄)、「紅

いも」(白)、1960年代では「照間」(黄白)、「平安山7号」(淡紫)、「宮農36号」(濃紫)、1970年代では、「平安山7号」(淡紫)、「ナカムラサキ」(淡黄紫)、「照間」(黄白)、4番目に「宮農36号」(濃紫)となっている。

これらを年代別に上位を占める品種の推移をみると、戦中・戦後から次第に「ナカムラサキ」、「平安山7号」、「宮農36号」等の肉色が紫を呈する品種が増えていくのがわかる。では、現在“紅イモ”と呼ばれるようになった肉色が紫から濃紫を呈する品種を辿ってみると、1947年に育成された「宮農36号」の記録に辿りつく。「宮農36号」の交配親は「紅いも」×「ハワイ」で、このうち母本となった「紅いも」は、他の資料では「紅蒨」や「紅」等と記録されているが、琉球農業試験場の資料(1968年)には皮色は濃紅、肉色は白となっている。また、父本となった「ハワイ」は、保存品種名に「布哇」名での記載はあるが、皮色は紅、肉色は白である。また、琉球農業試験場の資料である手書きの品種保存リスト(作成年不記載)では、「紅いも」の皮色は濃紅、肉色は白、「ハワイ」では4品種が記載されており、保存品種名「ハワイ」は前掲資料の「布哇」をカタカナで表記していると思われ、皮色が紅、肉色が白で一致している。新たにハワイから導入され、保

存品種に追加された「ハワイ(A)」、「ハワイ(B)」、「ハワイ導入」の3品種は、茎葉の特性だけが記載され、塊根の特性欄は空白となっている。「宮農36号」の父本に使われた「ハワイ」の特性をつきとめなければならない。通常、白肉色同士の交配や、白肉色と紫斑色との交配から濃紫色の系統が育成できないと思われるが、もし事例があれば御指摘願いたい。

一方、1980年代後半頃から「ハワイ紅」と呼ばれるようになった在来系の品種がある。主に沖縄本島南部地域で栽培され、皮色が白、肉色が濃紫を呈する。名称の由来、栽培の経緯等は不明であるが、名称どおりであればハワイからの導入品種ということになる。この品種について、久米島でかんしょを栽培している仲村智弘氏(大正14年生まれ)によれば、那覇市小録出身の赤嶺正次氏が「ハワイ紅」とよばれる品種をハワイから持ち帰り、これを1960年前後に仲村氏本人が久米島に持ち帰り栽培を始めた。久米島へ導入した当初は、名称はなかったが、1970年代後半、“読谷紅イモ”が県内で認知されるようになったころ、沖縄本島南部地域を中心に栽培されてきた濃紫色の「ハワイ」に対して「ハワイ紅」と呼ぶようになったと思われる。